Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

体感!!縄文人のおしゃれ

平成25年度企画展示 始まる

東京都埋蔵文化財センター報 92

春の山菜

コゴミ（屈）
ワラビ（蕨）
ゼンマイ（薇）

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。これらの植物と縄文人とのかかわりについて紹介します。

４月に入ると、暖かな日差しの中で沢山の草花が息吹始めます。春の遺跡庭園は花の季節。コブシが咲き、ヤマブキの生垣（いけがき）が黄色く染まり、カタクリの紫が色を添えます。ニリンソウ、イチリンソウ、アズマイチゲ、イカリソウ、タチツボスミレ、シャガ、ヤマザクラなどなど…数えあげればキリがありません。毎日のように、新しい植物が芽を出し、花を咲かせます。

そんな中、遺跡庭園の奥、前回紹介したカラムシの畑と一番奥にある復元住居の間に、今回紹介する春の山菜たちが芽生えます。

山菜は多種多様で、種類によってその収穫する時期も異なります。しかし何と言っても、春の味覚としてのイメージが強いのではないでしょうか。秋に溜（た）め込んだ木の実や、狩猟で得た肉類などで寒く厳しい冬をしのいだ縄文人たちにとって、春の到来を告げる山菜は、食料としてばかりではなく、暖かな過ごしやすい季節の訪れを告げる特別な存在だったのでしょう。その証拠に、山菜を春の味覚として好む風習はいまだに残っていますよね。山間部における山菜採りの厳しさを幾度となく随筆（ずいひつ）に書いている、作家にして釣り師、そして美食家として有名だった開高健（かいこうたけし）も、様々な味覚の中でも山菜のほろ苦さが最もノーブルなものだと激賞しています。

その一つである**コゴミ**（タイトル写真）は、クサソテツの若芽です。日本各地に自生するシダ植物で、山道の道端や崖の下など比較的陽当たりが良い湿った場所を好みます。渦巻状に丸まった幼葉（ようよう）は、アクがあまりなく調理も簡単で、今でもおひたしやゴマ和え、天ぷらなどにして食べられています。植物質の遺物は、土中で腐って無くなってしまうことが通常です。しかし、富山県桜町（さくらまち）遺跡からは、奇跡的にほぼ完全な形のコゴミが見つかっています。

ワラビも馴染（なじ）み深い山菜のひとつです。シダ植物で、アクが強く生のままでは毒性があるため、食べるには熱湯と木灰（もくばい）でアクを抜いたり、塩漬けにするなどの工夫が必要です。また、根からはデンプン（ワラビ粉）が採取できます。今ではイモ類のデンプンが使われることの多い、夏の風物詩（ふうぶつし）である“わらび餅”は、このワラビ粉を利用するのが本来です。醍醐天皇（だいごてんのう）もこのわらび餅が好物で、「大夫（たいふ）」の位を授けているほどです。

ゼンマイもシダ植物の一種です。新芽は渦巻状になり、表面を綿毛が覆っています。時計や玩具などの動力源のバネをゼンマイバネと呼ぶのは、この新芽の特徴的な形に似ていることに由来します。湯がいてアク抜きをした後、干して乾燥させれば保存が利くことから、古くから保存食や救荒食（きゅうこうしょく）として重要なものでした。確たる証拠は見つかっていませんが、縄文人も土器でゆでた後乾燥させ、貴重な保存食として利用していたのではないでしょうか。

さて、二年半にわたってお送りしてきたこのシリーズですが、今回でひとまず終了いたします。

このシリーズで縄文人と植物の関わりに興味を持っていただけましたら、ぜひ遺跡庭園「縄文の村」を訪れてみてください。（武内）

ゼンマイ

ワラビ

遺跡だより 96

新宿区 尾張徳川家下屋敷跡（おわりとくがわけしもやしきあと）

所 在 地：新宿区戸山 1 丁目 20-1 外
調査期間：2012 年 7 月 9 日～ 7 月 30 日
調査面積：596 ㎡

遺跡は、尾張徳川家下屋敷跡 (新宿区№ 85) として登録されています。江戸時代に、尾張徳川家の下屋敷のひとつで「戸山屋敷（とやまやしき）」と呼ばれ、東は早稲田大学戸山キャンパス西側から国立感染症（かんせんしょう）研究所、西は明治通り付近、南は大久保通り、北は早稲田通りにいたる約 56 万㎡の広大な面積を有していました。遺跡は、これまでにも調査が実施されており、今回で第 7 次の調査になります。今回の発掘調査地点は、新宿区戸山 1 丁目 20 － 1 外に所在し、財務省関東財務局が所管します公務員住宅に付随する児童公園があった所で、調査面積は 596㎡です。

今回の調査で検出された遺構には、下屋敷に住んでいた藩士の長屋と思われる建物の柱跡や井戸、土坑などがありました。建物は、文化 13 年 (1816) 以前や元治元年 (1864) に描かれた絵図にも記載されており、調査地点周辺に藩士の長屋があった地点と照合できる成果が得られました。

建物の柱跡には、埋め土の中に砂利だけが混ざる柱跡と砂利と一緒に遺物が多数混ざる柱跡の 2 種類がありました。それぞれの柱跡は、数や配置が異なることから、最低でも二度の建て替えが行われた可能性が考えられます。また、各々の建物の種類には、住まいとしての長屋のほかにもトイレや屋外竈（かまど）と思われる施設もあり、規模や構造が違っています。また、当時のお金をまとめて埋めていた穴、壊れた陶磁器や瓦などをまとめた「ゴミ捨て場」のように遺物が集中している場所もありました。

遺物は、江戸時代の前期 (17 世紀後半) から幕末 (19 世紀中葉頃) にかけての陶磁器や土器類などの生活雑器、屋根に葺（ふ）かれた瓦、建物に使った釘、鎌、簪（かんざし）などの金属製品、砥石（といし）や硯（すずり）、火打石（ひうちいし）、木製品には柱や井戸枠（いどわく）などが出土しました。これらの遺物は、長屋に住んでいた藩士とその家族が使っていたものと考えられます。また、長屋の柱の間からは、合わせ口になった胞衣皿（えなざら）(お産の後の胎盤（たいばん）を埋納（まいのう）する容器) がまとまって出土しているところがあることから、子供を持つ夫婦も住んでいたようです。

（小坂井）

江戸時代の建物跡

江戸時代の建物跡と便所跡

江戸時代の遺物集中箇所の状態
（合わせ口の胞衣皿が多数出土しました）

江戸時代の寛永通寶と遺物の出土状態

ぶらり旧石器さんぽ　Vol.4

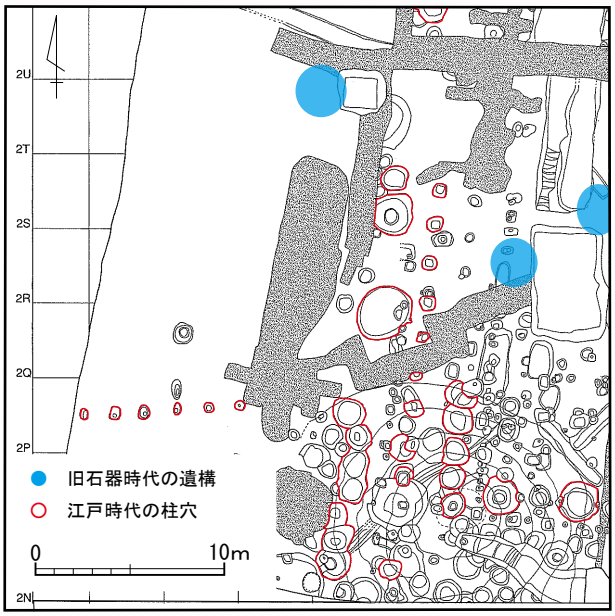
都心の遺跡　新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡ほか

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの土地の起伏などの地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

江戸と旧石器　都心部は、江戸時代には江戸の町でした。現在盛んに江戸時代の遺跡の調査が行われていますが、時々江戸時代の遺跡の下から旧石器時代の遺物が出土することがあります。ただ、江戸の町をつくるにあたって丘を削り谷を埋め平らにする大造成工事を行いました。そのため、元の地形を復元することが難しく、地形と遺跡の関係を理解しにくくなってしまいました。明治時代以降の造成が影響していることも、もちろんです。

都心部の地形　武蔵野台地はもともと多摩川が形成した扇状地です。そのため、起伏はゆるやかで小河川がつくる谷は直線的です。遺跡はこの小河川に沿って立地します。しかし都心部は地形形成過程が異なっていて、起伏は激しく、谷は樹の枝のように複雑な形をしています。そのような場所では、遺跡はどの谷の近くにあるかわかりません。どちらを向いても谷がありますから。

このような特性から、都心部では遺跡の立地にどのような傾向があるのかまだよくわかっていません。

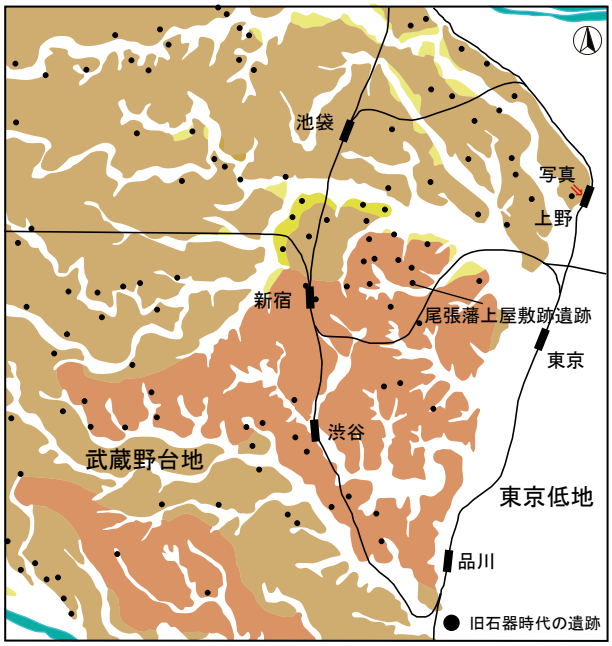


新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡の遺構
尾張藩邸の御殿の柱穴が発見された下から、旧石器時代の石器が出土した。（東京都埋蔵文化財センター 2001『尾張藩上屋敷跡遺跡』Ⅶをもとに作成）

上野の山から上野駅を望む
旧石器時代には眼下には約 100 mの谷があった。

これからの課題です。

深さ 100 mの谷　さて、京浜東北線を赤羽から上野方面に向かうと、右側の車窓に約 20 mの大きな崖が続くのが見えます。この崖は武蔵野台地の東端で、電車は東京低地の上を走っています。現在でこそ高低差は 20 mですが、旧石器時代、約 2 万 5 千年前は約 100 mもの差がありました。海面が低下し東京湾は陸地になり、その影響で深い谷が刻まれたのです。そのダイナミックな地形は、大型動物を狩猟する絶好の狩り場として機能したものと考えます。（伊藤）



都心部の地形と遺跡
谷が樹の枝のように伸びているのがわかる。そのため都心部は起伏が激しく坂道や階段が多い。都心部では、遺跡は川に沿って並んでいるようには見えない。（東京都埋蔵文化財センター 2012『研究論集』ＸＸⅥをもとに作成）

続 大江戸 掘りもの帖 ～４～

箸にも棒にも・・・

「箸にも棒にもかからぬ」―ひどすぎて取り扱うべき方法がない。手がつけられない― 広辞苑

まるで、低地の江戸遺跡の膨大な木製品・木材に当惑する筆者の心情を代弁しているようです。

豊富な森林資源を背景に、木材は加工のしやすさと幅広い技法によって生活の様々な場面で生活材として、土木・建築資材として都市江戸を支えてきました。しかし、腐りやすい、燃えやすいなど素材そのものの不安定な特性から、遺跡からの出土量は使用・廃棄、埋没環境に大きく左右されます。台地上の遺跡ではほとんど残らないのに対して、低地の湿潤な環境下では木の香が漂うほど生々しく残ることも。『たまのよこやま』75・76 で紹介した港区愛宕下（港区 No.149）遺跡でも、500 箱にも及ぶ木質遺物が出土し、現在、最終報告にむけて急ピッチで整理調査が進められています。筆者の当惑は、圧倒的な物量と他材質の遺物を凌駕する多種多様な種類、本来の形態や用途解釈の難しさにありますが、裏を返せば、考古学的に江戸文化を物語るうえで欠くことのできない豊富な情報量に対する嬉しい悲鳴でもあるのです。

「箸」を例に、機能・用途を推定していく過程をみてましょう。まずは箸に似た形態と大きさの細棒状の加工品を「箸状木製品」というくくりで抽出します。このなかには串、篦、楊枝、「足打折敷」の支持棒や縁板、屋根材の留串などが含まれているので、形態的な特徴からさらに「箸」を絞り込んでいきます。ひとくちに箸といっても規格は様々。両端部の先端加工形状からは、ひとくち（＝片口）のみならず寸胴・両口に大別されます。

港区愛宕下遺跡から出土した３種の白木箸

江戸時代には銘々膳の普及とともに塗箸が日常食膳具となったと言われますが、出土品では白木箸の削箸が大半を占め、多くはまとまって出土します。7-1 地点 330 号遺構（写真）では長さはまちまちながら 22 ～ 24cm 台に集中する傾向がうかがえます。木目に沿ってねじれたような粗い削ぎ取りは、けずり直しのようにも見受けられますが、いずれにせよ簡素なつくりから、短期間の使用で廃棄されたものと思われます。旧加賀前田藩邸である東京大学本郷構内の遺跡では、八寸の両口箸が折敷や素焼きのかわらけを伴って池跡から出土しており、寛永の将軍御成に伴う饗宴の食膳具と解釈されています。白木の再度の使用を忌み嫌い土に還す行為は、相手を敬うもてなしの心の表れです。同じ武家地である愛宕下遺跡での塗箸と白木箸の比率は、こうした精神性の反映なのかもしれません。

両口箸といえば、7-1 地点 320 号遺構での 25cm 前後に揃うまとまりが特徴的で、ヒノキやスギが多用される他の箸に比べてつくりが丁寧で手触りが滑らかな印象を受けます。時代は下りますが、明治 45 年に農商務省山林局が編纂した『木材ノ工芸的利用』の「九寸ノ両細」（両口、長さ８寸３分＝ 24.9cm）の柳箸に似た特徴を兼ね備えています。この箸材はヤナギではなく実際はミズキとありますので、詳しくは樹種同定を待ちたいところです。

このコラム自体が箸にも棒にもかからぬ内容でしたが、せめて意気込みだけは「箸や棒にかかる」ように、と木製品に向きあっています。　（大八木）

＜参考図書 ～ 木質遺物や箸を詳しく知るために＞

江戸遺跡研究会　2013 『江戸と木の文化』江戸遺跡研究会第 26 回大会発表要旨

高倉洋彰　2011 『箸の考古学』ものが語る歴史シリーズ 26　同成社

向井由紀子・橋本慶子　2001 『箸』ものと人間の文化史 102　法政大学出版会

農商務省山林局　1982 『木材ノ工芸的利用（復刻版）』林業科学技術振興所

土器・北の国から

－土器文様が語る縄文人の旅－

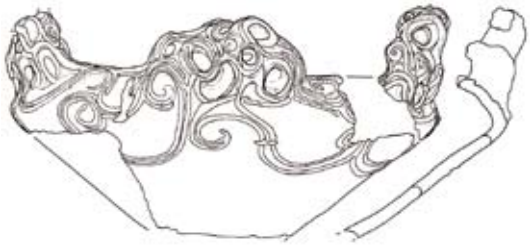
「縄文土器」と聞くと多くの人は、芸術家・岡本太郎にも大きな影響を与えた「火焔型土器（かえんがたどき）」を思い浮かべるのではないでしょうか。火焔型土器はその名の通り、炎のような形の突起や渦巻模様などの立体的な飾りがついている土器で、よく教科書などに縄文土器の解説と共に写真で載っています。しかし、この火焔型土器は、実は新潟県を中心とする限られた地域で盛んに作られた土器で、多摩などの南関東地方で見つかることはほとんどありません。

新潟で火焔型土器が盛んに作られた約 4,500 年前、多摩では「勝坂式土器」「加曽利Ｅ式土器」と呼ばれる土器が作られていました。勝坂式土器も加曽利Ｅ式土器も表面を複雑な模様で飾っていますが、火焔型土器に比べるとずっとシンプルに見える土器です。このように縄文土器は、それぞれの地域ごとに異なる顔つきをしたものが作られていたことがわかっています。よって、多摩でほとんど作られていないはずの土器が見つかった場合には、どのような過程を経てその土器が多摩にやってきたのかを考える必要があります。

比較的シンプルな土器が多く作られた多摩でも、ごく稀（まれ）に派手な渦巻模様で飾られた土器が見つかることがあります。多摩ニュータウン No.72 遺跡で見つかった浅鉢形土器は、渦巻形やＳ字形の粘土紐をいくつも重ねて貼り付けることによって、中が空洞になっている塊状の突起を作り出しており、同じ時期に多摩で多く作られた勝坂式土器には見られない特徴を持つ土器です。このような中空の突起は、南東北地方で発見される「大木式土器（だいぎしきどき）」と呼ばれる土器のうち、福島県の中通り地方や会津地方で多く作られたもので、多摩では見つかることが少ない珍しい土器です。

それにしてもなぜ、福島に多い大木式土器が、遠く離れた多摩で見つかったのでしょうか？　直線距離にして 200km 以上、間に険しい山や谷がたくさんあることから、縄文人が重くて壊れやすい土器を抱えて旅をしたと考えるのは、現在の感覚ではあまり合理的ではないように思われます。しかし、この土器に使われている粘土を肉眼で観察してみると、多摩の土器とは含まれている鉱物や焼き上がりの色などが違っており、福島の大木式土器に近い特徴を持っているように見えます。また、表面の縄文の付け方や撚（よ）りの方向、突起に使われている粘土紐の貼り付け方などの製作技法も、福島で発見されている大木式土器ととてもよく似ています。肉眼観察のみでは断定できませんが、福島から土器ごと運ばれてきた可能性も否定できません。少なくとも、実際に自分の目で、本場の大木式土器を見たことがある縄文人が作ったものである可能性が高いと言えるでしょう。

福島の縄文人が、この土器を大切に抱えて多摩へと旅してきたのでしょうか？　それとも、福島からやってきて多摩に住み着いた縄文人が、自分の故郷を想いながら作ったのでしょうか？　もしかしたら、多摩出身の縄文人が、旅先で目にした珍しい土器をまねて、土産話（みやげばなし）のように自分の仲間達に作って見せたのかもしれません。一つの土器から想像は無限大に広がりますが、それらの仮説一つ一つを丹念に検証し、より高い可能性を選び取っていくことが考古学研究の大切な作業であり、大いなる楽しみでもあります。みなさんもぜひ、この土器の謎に挑（いど）んでみませんか？　（合田）



（左上・下）多摩ニュータウン No.72 遺跡 324 号住居跡から出土した浅鉢形土器。塊状の大きな突起が特徴です。表面には、間隔をあけた縄文と、細い粘土紐を使った渦巻模様がつけられています。図面にしてみると、模様の作り方の特徴がよくわかります（左下）。

（右）福島県郡山市妙音寺遺跡から出土した大木式土器。土器の形は違いますが、No.72 遺跡の土器と同じように、塊状の大きな突起がつき、細い粘土紐を使った渦巻模様がつけられています。
（発掘調査報告書より転載　撮影：小川忠博）

多摩ニュータウンNo.540遺跡は、現在の八王子市南大沢三丁目に建つ都営南大沢団地とその東の緑道付近にありました。『たまのよこやま』90の本シリーズに掲載したNo.359・563遺跡とは、500m程の距離にあります。大栗川の支流太田川の上流域に位置し、柏木谷戸と清水入谷戸に挟まれた南北に走る支丘の痩せ尾根とその東西に広がる斜面部が遺跡で、その標高163mの尾根上から標高150mの斜面部にかけて、7,572㎡を調査しました。

発掘調査は、昭和55年の8月末から昭和56年1月初めにかけて行いました。当時の冬は今より寒さが厳しく、夜毎地面が凍って日中でも溶けず、まるで永久凍土のようでした。そして、午後3時を過ぎると、霜が降り始めて地面を一面銀色に変えるのです。音を立てるかのごとく霜柱が成長していく様子を遺跡で目の当たりにしたのは、横浜出身の自分としては初めてのことでした。また、雪が降って真っ白な丘陵に、発掘中の住居跡だけが黒々と姿を顕していた光景は、今でも忘れることができない程叙情的な美しさでした。

調査の結果、縄文時代草創期から中期の土器や石器、弥生時代の土器、7世紀後半から末葉の古墳時代末期の竪穴建物跡(竪穴住居跡)2軒、10世紀中頃から後半の平安時代中期の竪穴建物跡3軒等が検出されました。

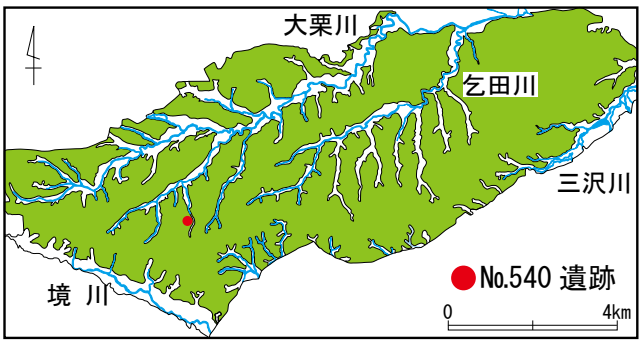
平安時代中期の竪穴建物跡で出土した土器は、九反甫谷戸に面するNo.359・563遺跡の竪穴建物跡出土資料とほぼ同時期に位置付けられます。No.359・563遺跡に比べ、バリエーションに大差はないものの器形のうかがえる資料が多く、両遺跡の資料を合わせ考えることで、当時出土例の少なかった当該期の土器に対する理解を一気に深めることができました。これには、No.359・563遺跡を調査した直後の発掘であったため、整理作業における比較検討が容易であったことも幸いしました。「く」字状に張り出す台状底部を特徴とする土師器の坏と小型甕・鉢のほか、台状底部ではない土師器の坏も出土しており、内面が黒色を呈するものも少なくありません。須恵器の坏がほとんど認められないのも大きな特徴です。

本遺跡から南西250mの至近距離にあるNo.533遺跡からも、同時期の竪穴建物跡4軒が検出されています。柏木谷戸の最奥部に位置し、構造にバラエティーのある竪穴建物跡で構成される点も共通しています。谷戸奥に複数の小規模集落を形成した人々の多摩丘陵における積極的な活動の様子が想像されます。本遺跡の調査成果は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第1集第2分冊と第28集に収められています。(江里口)

1/964

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃14 多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.540遺跡



多摩ニュータウンの遺跡

平安時代の竪穴建物跡[4号住居跡]

多摩ニュータウンNo.540遺跡全景

平安時代の土師器坏・小型甕・鉢

平成25年度　行事のご案内

行　事　名	対象／人数	日	時	備　考
東京都埋蔵文化財センター主催 文 化 財 講 演 会	参加自由	第1回7/27(土) 第2回9/21(土) 第3回12/7(土)	13:30～15:30	当日受付
東京都埋蔵文化財センター・ 多摩市教育委員会主催 文 化 財 講 演 会	参加自由	第1回2/12(水) 第2回2/19(水) 第3回2/26(水)	13:30～15:30	当日受付
遺跡発掘調査発表会	参加自由	3/21(祝)	13:30～15:30	当日受付
展示説明会	参加自由	3/15(土)	午前の部　10:00～ 午後の部　13:30～	当日受付 1時間程度
映像上映会	参加自由	1/25(土)	13:30～15:30	当日受付
自然観察会	20名	①4/6(土) ②10/19(土)	10:00～11:30	往復はがきで申し込み ①3/21 ②10/4 まで必着
縄文土器作り教室	①④一般30名 ②③親子15組 (小学4年以上)	制作　①5/18･19(土･日) ②7/20(土) ③7/21(日) ④9/7･8(土･日) 野焼き　①6/8(土) ②③共8/17(土) ④9/28(土)	制　作　9:30～16:00 野焼き 9:30～15:30	往復はがきで申し込み ①5/6 ②③7/8 ④8/26 まで必着
縄文アクセサリー作り教室	①②⑥⑦一般30名 ③④⑤親子15組 (小学4年以上)	①6/22(土)午前 ②6/22(土)午後 ③7/31(水)午前 ④8/10(土)午前 ⑤8/10(土)午後 ⑥1/25(土)午前 ⑦3/29(土)午前	午前　9:30～11:30 午後　13:30～15:30	往復はがきで申し込み ①②6/10 ③7/17 ④⑤7/29 ⑥1/13 ⑦3/17 まで必着
古代の糸作り教室	30名	6/30(日)	10:00～14:00	往復はがきで申し込み 6/17 まで必着
古代の布作り教室	②③一般30名 ①親子15組 (小学4年以上)	①8/4(日)午前 ②8/24(土)午前 ③11/16(土)午前	午前　9:30～11:30	往復はがきで申し込み ①7/22 ②8/12 ③11/1 まで必着
トンボ玉作り教室	各時間帯　一般6名	①7/13(土) ②9/14(土) ③11/30(土) ④12/21(土) ⑤1/18(土) ⑥2/8(土)	10:00～11:00 11:00～12:00 13:00～14:00 14:00～15:00 15:00～16:00 の希望する時間帯	往復はがきで申し込み ①7/1 ②9/2 ③11/18 ④12/9 ⑤1/6 ⑥1/30 まで必着
貝のブレスレット作り教室	30名	11/9(土)	9:30～11:30	往復はがきで申し込み 10/28 まで必着
考古学実習①-縄文食体験	一般10名 親子10組	①10/26(土) ②10/27(日)	9:30～13:00	往復はがきで申し込み ①②10/11 まで必着
考古学実習②-火おこし体験	一般10名 親子10組	①8/3(土)午前 ②8/3(土)午後	午前9:30～12:00 午後13:30～16:00	往復はがきで申し込み ①②7/22 まで必着
考古学実習③ -遺構を実測してみよう	一般10名	10/5(土)	9:30～16:00	往復はがきで申し込み 9/20 まで必着
考古学相談室	参加自由	通年(土日は除く)	10:00～16:00	受付随時
縄文ワクワク体験まつり	参加自由 (勾玉作りは予約制)	5/3(祝)･4(祝)	10:00～16:00	当日受付

往復はがきでのお申し込みは、催事名･住所･氏名･年齢･電話番号をご記入のうえ、東京都埋蔵文化財センター「〇〇〇(催事名)」係宛まで。
「一般」は中学生以上、「親子」は小学4年生以上の親子。
なお、応募された方の個人情報は、該当事業実施のための案内のみに利用します。

平成 25 年度
企 画 展 示　「縄文人のおしゃれ～装い・デザイン・色彩～」**堂々オープン！！**

たまのよこやま 92　　2013 年 3 月 29 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/